

3 総括稿

総括稿 1

「領域別科目群」の成果と反省点

経済学部教授／総合教育科目構想・運営チームリーダー 中島 俊克

はじめに

2012～2015年度に実施された総合教育科目（2012年度カリキュラム）の特色であった「領域別科目群」は、野心的な試みであり、成果はもちろんあったが反省すべき点も多かった。領域別A・領域別Bの順に総括をし、最後にまとめとして、その反省点が新カリにどのように生かされようとしているかを述べる。

領域別A

領域別Aは、「立教大学の専任教員は自学部の学生だけでなく立教大学2万人の全学生に対して教育責任がある」という建前のもと、各学部の入門科目を他学部学生に開放してもらう試みであった。予想されたメリット・デメリットは以下の通りであった。

メリット

- ・全カリ総合教育科目のヴァリエティを一挙に増やすことができる。学際的な教育を行うと称しつつ、実際には学生の好みに合わせ「新書系」に偏ってしまっている全カリ総合の展開科目を、よりアカデミックなものに引き戻す効果も期待できる。
- ・学生にとっては、立教大学で教えられている諸分野を一望でき、立教大学そのものについての認識を深められ、「自校教育」の一助となる。
- ・専門の勉強だけで満足できない優秀な学生の知性をより柔軟に伸ばせる。また初めから自学部の専門分野を学ぶ動機が強い学生には、勉学を続ける励みとなる。
- ・教員にとっては、専門の違う学生に教える経験を積むことで、自己の専門を客観的に見直す機会を得、視野を広げることができる。
- ・編成側にとっては、より多くの専任教員に全カリ科目を持ってもらうことで、全カリ総合についての認識を深めてもらえる。

デメリット

- ・学生にとっては、自己の専門とは違うのでやはり敷居が高く、中途半端な理解に終わりがちである。
- ・科目数の展開が十分でなく、また抽選登録であるため、多くの受講者の履修動機が薄弱なケースも出てくる。
- ・学生の一般的な興味（文学部・社会学部のサブカルチャー系や経済学部・経営学部の国際系など）と展開コマ数を合わせるのが難しいので、どうしてもミスマッチが生じるし、教員の負担も分野により違いが出てしまう。
- ・教える側も一般に、学部での入門科目をそのまま繰り返したのでは学生に理解されにくいいため、授業準備に工夫と労力が必要となる。
- ・学部としてはどうしても専門科目にエース級の教員を投入したいので、全力を担当するのは比較的経験の浅い若手になりがちである。

実施にあたり、受講者については自学部提供科目の履修を不可とし、担当者については純粋の専任教員だけでなく特任教員・助教の担当も可とするという、2点の妥協を余儀なくされた。そのため予定していた上記のメリットの多くが減殺されたことは否定できない。成功した事例も多いが、自己の研究に追われる若手教員は授業について、専門外の学生の興味をひくような工夫を十分行う余裕がなく、自学部で担当している入門科目の内容を若干薄めただけのものを提供することとなり、担当者も受講者も不完全燃焼に終わってしまう例が多数見られた。編成側としても、4年間の実施期間中、分野ごとの展開コマ数や時間割配置等の面で種々工夫を試みたが、初期に設定した枠組みを大きく崩すことができず、授業評価アンケート等で学生の評価が他の科目群より低い状況を覆せなかった。アンケートの回答を精査すると、教員の期待に応じて最後まで話についていけた優秀な学生は非常に満足したが、一般の学生に関しては、受講仲間は門外漢ばかりで助けがなく、先生の話は敷居があまりに高いので、途中で理解を諦めてしまうというケースが続出したことがわかる。学部専任教員の広範な協力を期待しながら、全力総合への学部ごとの専任分担枠は大きく変わらなかったのも、専任教員が領域別に集中してしまい、主題別の方が空洞化する（兼任ばかりになる）という現象も、分野によっては見られた。以上を総合すると、当初の狙いは楽観的に見ても半分程度しか実現できておらず、野心がから回りしてしまった部分があることは否めない。少数ながら、この科目を担当したことがきっかけで全力で教えることの面白さに目覚めてくれた専任教員があることに安堵している。

領域別B

領域別Bは、領域別Aの演習版として企画されたものである。門外漢にも題名が周知されている古典や名作を、様々な専攻分野の学生とともに学際的に読み解くことで、教

員は自己の研究に関して知的刺激を得、受講者は柔軟な知性を育むとともに「読む」能力を鍛錬して専門の勉強に役立てる、という、領域別Aよりもさらに野心的なものであった。理学部は分野としてこうした科目内容にそぐわないので、担当予定学部から除かれた。予想されたメリット・デメリットは以下の通りである。

メリット

- ・ 古典や名作を入口にすることで、普段あまり書物に親しんでいなかった学生にも、本を深く読むことの面白さを味わわせることができ、「本好き」が増える。自分の専攻と違う書物に触れることで知的刺激にもなる。
- ・ 教員の側も、自己の学問の足元を見直すきっかけになる。
- ・ 編成側も、受講者が多様なため雑な内容になりがちな全カリ総合の演習系科目でアカデミックな方面を強化できる。

デメリット

- ・ 多くの分野では、入門的な書物でなくいきなり古典を読むことは、受講者とくに1～2年生にとりハードルが高い。うまくやらないと、かえって「本嫌い」を増やしてしまう恐れがある。
- ・ 普段は自己の研究領域に閉じこもっている教員にとっても、古典の学際的解釈に精通するためには、「領域別A」以上に大量の準備が必要で、若手教員にとっては大きな負担。
- ・ 受講者の反応に応じてテキストを変更するなどのケースが頻発すれば運営が混乱する。

開講科目のヴァリエティが増えたことは、全体に受講者には歓迎されていたと考える。ただ領域別Bについては、開講科目数が十分でなかったこともあり、抽選登録の制度の下で、受講動機が薄弱な学生、とくに未熟な1～2年生が、訳も分からずに受講するのを防げなかった。ネット育ちの学生たちは、「読む」以前に、本を手にする事自体に慣れていなかった。それらの学生への動機づけに成功した、技量豊かな教員もいないわけではなかったが、多くの教員は受講動機の強い優秀な学生ばかりを相手にすることになり、領域別A以上に脱落者が続出した。科目担当者に独自アンケートを実施したところ、多くの教員に戸惑いがみられ、科目の枠組みについての不満もかなりあった。開講科目多様化の試みとしては意義があったが、内容はやはり野心的に過ぎ、担当者に多くの負担を強いた割には予期した効果が十分に上がらなかったといえる。

新カリに向けて

2012年度のカリ改革は、全カリが現在の運営体制になってから、総合チームが初め

て手掛けたものであった。全カリ発足以来掲げられた高尚な理念とは裏腹に、学部間の利害対立から旧態依然たる教養教育の枠を出ることができなかつた状況を打破しようと、リーダーを中心に集まった少数精鋭のチームメンバーが、英知を結集して練り上げたプランは、内容のレベルアップと全学的な協力体制の確立を一挙に目指そうという意欲的なものであった。理系の縛りをなくすかわりに、自校教育を中心にメリハリのきいた多彩な科目群を展開できたのは大きな成果であったと言える。全学的な協力体制への道筋も、ある程度はつけることができたと言えよう。しかし、領域別A・Bに関して言えば、各学部からの資源投入の限界や学生の実際の履修行動に関して読みの甘さがあり、上記のように理想と現実の乖離が目立ってしまった。教育熱心なチームメンバーの先生方が、十分な資源的裏付けが得られないまま、やや理想に走り過ぎた結果といえよう。履修学年の指定ができない状況の中で、優秀な学生、主として3～4年生の旺盛な知的関心を満たすという目標と、主として1～2年生からなる、アカデミックな学習に不慣れな学生のボトムアップをはかるといふ目標を、同時に追求しようとしたことが、そもそも無理であったと総括できる。

全体として失敗の側面が大きかったかもしれないが、この試みは無駄ではなかつた。2016年度に向けての改革では、3ステージの実施に合わせ、「導入期」向けには「学びの精神」が、「完成期」向けには「立教ゼミナール発展編」が展開されるが、前者には領域別Aの、後者には領域別Bの経験が生かされている。(スポーツ実習と並んで)1年春学期から唯一履修可能なカテゴリである「学びの精神」では、講義内容は可能な限り平易なものとし、講義形式の授業を受講するスキル(考えながらノートをとり、リアクション・ペーパーを書く)を新入生に身につけさせることに重点が置かれる。内容としては、総合チームが自ら編成する、立教科目群「立教A」の流れをくむ自校教育系の科目に加え、各学部が提供する、それぞれの分野の「超入門」科目が並ぶことになるが、兼任講師を可とする代わりに特任教員・助教の担当は不可とされ、また(法学部を除き)自学部提供科目の受講も可とされる。また「立教ゼミナール発展編」は、制度的に縛りはしないものの明確に「3～4年生向け」と位置付けられ、資源的にも半コマ分のゲスト・スピーカー枠が追加されて、学際的な学びを効果的にプロモートする仕掛けになっている。むろん新カリには(「統合カリ」という)それ自体の目標があるが、それに加え、旧カリとなる領域別科目で追求された目標が、ステージごとに区分けされることで、より実現されやすくなるよう、工夫されているのである。2012年の改革を主導された先生方の目には「退却」と映る側面があるかも知れないが、資源投入や学生の履修動向の現実を踏まえた上で、精いっぱい理想を追求したつもりであり、先人たちの努力を無にするものでは決してないことを、強調しておきたい。